

日本クリスチャン・ペンクラブ(JCP) 関東



# 文は信なり

No.37 2018年 新緑号 誌代 100円

発行責任者  
三浦喜代子(代表)  
事務局  
〒131-0043 墨田  
区立花4-6-13  
TEL&FAX  
03-3616-8621  
郵便振替  
00170-0-61838  
HP:<http://jcp.daa/>

【目次】 P1~2 駒田隆 P3 土筆文香 P4 楨尚子 P5 藤井千明・井上弘子  
P6 松下勝章・西山純子 P7 長谷川和子 P8 山本披露武 P9~10 三浦喜代子  
P11 篠田一志、富岡国広 P12 島本耀子 P13 佐藤晶子・安東奈穂美 P14 事務局より

## 『うつわの歌』

駒田 隆

今、わたしの前に、一冊の本が置かれています。その本は『うつわの歌・新版』（みすず書房・二〇一四年）と題し、著者の名前は神谷美恵子とあります。

神谷美恵子さんは、ご承知の方も多いと思いますが、恵まれた環境にありながらも、五一歳の時、ハンセン病患者の施設である、岡山県の長島愛生園医長に就任され、五三歳で辞任された後も、非常勤医師として、愛生園に加えて、同じ島の邑久光明園、香川県の大島青松園でも診療をされ、五八歳で病のためこれらの診療を辞任された後も、患者さんや職員と電話や文通で対話をされ、何回かの入院生活を繰り返されて、六五歳で昇天された精神科医でした。

神谷さんのご主人（結婚当時は、東京大学植物学教室講師）は語っています。

「愛生園に行って働くことは、彼女にとつてはいわば「天の声」に従うためのやむにやまれぬ行動であった。しかし一方また、そのために家庭を犠牲にしたくはない、よき妻、よき母でありたいとする願望が彼女には人一倍強かった。これをどうして両立させることができるか？ 家にはまだ小学

生の息子が二人いる。家をあけるためには、どうしても子供達の世話をするお手伝いが 必要になる。しかし私の俸給ではお手伝いを雇うだけの余裕がない。そうかといって 彼女は私にアルバイトをさせようとは絶対にしなかった。彼女は自ら語学の教師をして我が家の家計を助けた」とあります。さいわい、良いお手伝いさんが見つかりました。

「島での三・四日の業務を終えて帰るときはいつも疲れ果ててはいたが、家族との再会を心から喜んだ。疲れて帰る妻に対して私になし得たのは、ただいたわりの言葉で彼女を迎えることだけであった。

帰れば神戸女学院大学（昭和三十八年以後は津田塾大学）への務めや、著作、留守中の文債、訪問客との応対、それに一家の主婦としての数々の務めなどが山積している。

彼女はぐち一つ言わず、むしろゆとりとユーモアをもってそれらを能率よくこなしていた。

また東京に住む私の実母を安心させ喜ばすためにいつも心を配った。私は多年の外国生活で英語の力など充分でなければならぬはずなのだが、実際はなかなかそうはいかない。私が書く英語の論文や著書の原稿直しについて、彼女はいつも献身的な協力をした」

彼女は歌っています。

### うつわの歌

神谷美恵子

私はうつわよ、

愛を受けるための。

うつわはまるで腐れ木よ、  
いつ壊れるかわからない。

でも愛はいのちの水よ、

みくにの泉なのだから。

あとからあとから湧き出でて  
つきることもない。

うつわはじつとしてるの、

うごいたら逸れちゃうもの。

ただ口を天に向けてれば、  
流れ込まない筈はない。

愛は降りつづけるのよ、

時には春雨のように、

時には夕立のように。

どの日も止むことはない。  
痛い時もあるのよ、

あんまり勢いがいいと、

でもいつも同じ水よ、

まざりものなんかはない。

うつわはじきに溢れるのよ、  
そしてまわりにこぼれるの。

こぼれて何処へ行くのでしょうか、  
そんなこと、私知らない。

私はうつわよ、

愛をうけるための。

私はただのうつわ、  
いつもうけるだけ。

(一九三六・一一・三)



そして、彼女の朝は、祈りで始まります。

### 貧しき主婦の朝の歌

神谷美恵子

うつくしきかなこの日

神のたまえるこの日

天にはよろこびかがやき

地にはいのちのかおり

我何をもてみたさん

神のたまえるこの日

そのひとときに

みいぶきのかよえるこの日

我ひねもすみ名を讃えん

神のたまえるこの日

裏に火起こすときより

子らのねむり着くまで

(一九三八・六・一八)

ご主人は、最後に語っています。

「対外的には悩める人、病める人の側に立ち、対内的にはよき妻、よき母になろうとして、力のかぎりをつくした生涯であった。

愛生園には通えなくなっても、死ぬまで心は患者さん達と結ばれていた」

(引用資料は、すべて『うつわの歌・新版』による)



## 【旅行記】 カツオドリを追い求めて

土筆文香

二〇一七年四月、夫と旅行に出かけた。行き先はわたしの希望で三宅島になった。なぜ三宅島なのか……カツオドリがいるからだ。

子ども家庭集会でクイズを出すことになり、世界最速の鳥をネットで調べた。一位から順に見ていくと、カツオドリの画像が目にとび込んできた。シャープでかっこいい羽根。愛嬌のある顔。海上では速いのに、地上では不器用にヨチヨチ歩く姿に魅せられてしまった。

カツオドリを主人公にした童話を書きはじめた。児童文学の仲間に見せると「カツオドリの飛ぶ海の色は何色ですか？」と聞かれた。答えられなかった。海の色どころかカツオドリを実際に見たこともなかった。

カツオドリは動物園では飼育されてない。赤道近くか小笠原諸島に行けば見ることができそう。父島は船で二四時間もかかるという。飛行機は飛んでいない。

調べていくうちに三宅島の沖にある二本(さんぼん)岳(たけ)という岩に営巣していることがわかった。三宅島は船で六時間だ。期待と不安を抱いて夫とさるびあ丸に乗り込んだ。港に着くと、早朝なのに民宿の人が迎えに来てくれていた。

まずは宿で朝食をとり、観光タクシーで島内を巡った。三宅島は太古の昔から、何度も噴火を繰り返してきたそう。現在も年に数回程度、小規模な噴火が起きているという。

溶岩流にのまれた阿古小中学校跡が当時のままの状態が残っていた。流れ出た溶岩が小中学校の校舎で止まったそう。幸い学校の休みの日だった。もしここに子どもたちがいたら……と思うとぞっとした。溶岩の隙間から葉が茂り、枝を伸ばしていた。

島を巡っている間はカツオドリに会えなかった。運転手さんに「カツオドリはいませんか？」と尋ねた。「飛んでくることもあるけど今日はこないね」との答えにがっかりした。

夕方ひとりで海岸に出た。遠くに三本岳が見えた。あの三本岳にカツオドリがいる。こちらに飛んでくるかもしれないと期待して待った。が、いつまで待っても現れなかった。

そのかわり海の色、磯のにおい、波しぶき、波の音など五感を使って全身にしみこませた。

海岸には誰もいなかったが、後ろに誰かがいるような気がして、何度も振り返った。

カツオドリの代わりにスズメぐらいの鳥がとんできて消波ブロックにとまった。私を慰めてくれているのか、いつまでも飛び立たず、じっとしていた。そっと写真を撮った。あとで見たらアカコッコだった。

翌日は自然観察センター・アカコッコ館でバードウオッチングを予約していたが、アカコッコ館の近くにはカツオドリはいないそう。漁師さんに頼んで釣り船で三本岳に行くことができるという。夫に言うのと反対された。小雨が降っていて、風も出てきたからだ。

カツオドリに会えないまま帰ることになるかもしれないと思ったが、落ち着いた気持ちで予定通りアカコッコ館に行った。

日本野鳥の会のレンジャーが野鳥観察を導いてくれた。ウチヤマセンニュー、アカコッコ、牛のように鳴くカラスバトに出会った。

帰りの船の時間が近づいてきた。バスに乗って港へ向かった。二階の展望スペースに行くと、海鳥が飛んでいた。カツオドリだ。

何羽も何羽も飛交っている。あまり驚いて、「カツ、カツ、カツ……」と言ったまま、言葉が出なくなった。

「ここで待っていたんだよ。神様の愛を伝えるお話し、早く書いてね」とカツオドリに語りかけられている気がした。

身体が熱くなった。主がともにおられたのだ。



## 松本恵子という人 榎 尚子

この名前を知ったのはほんの偶然だ。

岩波書店情報誌「図書」が置いてあったので、何の気なしにもらってきた。

中でも目を引いたのが「アガサ・クリステイの紹介者、松本恵子のこと」（川本三郎）だった。

アガサ・クリステイの名を知らない人はまずいない。推理小説も普通の小説もなかなか味がある。

登場人物に語らせる言葉が作者の人生観を表している。多くのクリステイ本の訳者は中村妙子か深町真知子だった。

松本恵子は一八九一年（明治二十四年）、函館に生まれた。明治時代の中期、西洋文化が入ってきた中で、文部省による教育行政が右に左に揺れていた頃だ。そんな時期にクリステイを日本に紹介する女性がいたことは驚きだった。

川本氏は十代の頃『青列車殺人事件』を松本訳で読んだそうだ。日本の怪奇小説、探偵小説とはかなり雰囲気が違う。大正から昭和にかけてクリステイの作品を紹介したそうだ。まさに草分けであろう。

大正時代に訳した『魔法の人』は中野圭介の名で出している。男の名前になっているのは当時、女だてらに探偵小説を訳すのは社会の風潮に受け入れられなかったから、と川本氏。

松本恵子はクリスチャンだった。父親は札幌農学校の第一期生で、クラーク博士の教えを受けた人だった。一期下には内村鑑三や新渡戸稲造がいた。恵子の父は農学校を卒業後アメリカに留学し、その後北海道の水産業の開拓者となった。また恵子の祖父も北海道開拓期に土木事業に貢献したそうである。

その様な中で恵子は幼いときから日曜学校に通い、内村鑑三の聖書研究会に親しんで育ったという。

一九一三年、恵子はキリスト教主義の青山学院女学院英文科に入学した。卒業後大正五年に、恵子は金持ちの娘の家庭教師としてイギリスに留学した。まだ若い女性が海外に行くなど考えられなかった時代である。その決め方もユニークで、親に相談することなく自分の意志で決めた。自立した親子だった。その地で遊学中の松本泰と出会い、結婚した。

帰国後の二人が住んだのは中野区の谷戸である。そこは「谷戸の文化村」と呼ばれ、田川水泡、若き日の小林秀雄らがいた。この頃泰と二人で『探偵文芸』という雑誌を作り、クリステイの翻訳を載せていた。

恵子のもう一つの業績は児童文学の翻訳である。『若草物語』『あしながおじさん』等、今に至るまで親しまれている。また夫と共にディッケンズの物語全集を出した。児童書の全集など誰も考えな

かった時代である。これら翻訳ものが戦争のさなか出版されていることに注目したい。『くまのプーさん』が出されたのも戦時中だったが、よくぞ出されたと思う。しかしこの本に関しては、同時期に出された石井桃子の方に軍配が上がったようで、今A・A・ミルンと松本恵子を結びつけて知る人は少ない。

なぜ恵子が児童書の翻訳に携わったか。それは幼い時に受けたキリスト教教育のためではないか。戦後、クリスチャン女性の何人かは外国の優れた児童書の翻訳に使命感を持っていたといわれる。村岡花子、中村妙子らである。

図書館からクリステイ作・松本恵子訳『情婦』（角川文庫）という本を借りてきた。少し古めかしい気がしたが、読んでいて面白かった。以前に読んだことがある本だということが分かった。

明治以降、多くの文学者が優れた外国文学を私たちに紹介してくれた。松本恵子が谷戸の文化村でせつせとクリステイを翻訳した時代、児童文学紹介によき働きをした時代、それぞれ周囲には彼女を育ててくれるすばらしい人がいたに違いない。今、私達はそれぞれの時代の訳を楽しむことができる。松本恵子訳もそのひとつである。



## 三浦喜代子姉との出会いから

藤井千明&amp;井上弘子

二〇一六年、私は、救世軍の『社会鍋』について新たな協力者を得るため、また広く一般にさらなるアピールを考える会議の一員として話合っていました。その一つとして、俳句の季語にもなっているのだから、まず俳句コンテストを催したらよいのでは、というアイデアが浮上しました。

『社会鍋』は明治から続けられている街頭募金で、助けを必要としている方々への支援活動を行ってききましたが、年々、その知名度や献金額が下がってきていることが懸念されていたのです。

私自身は、俳句を嗜むなどということとは縁遠く、俳句とは何ぞや!、というくらいのレベルなのですが、周りにも詳しい人は誰一人としていない中で、私がこの担当を請け負うことになったのは、福島県の被災地から移住し同居していた母が、俳句を詠むというだけの理由からでした。

震災後の数年間、この特別な経験を俳句に詠むようにと、母に勧めましたが、自暴自棄と言うか目的を失ったというか、母はまったく気持ちが悪くありませんでした。

この話を具体的に考え始めた頃には、母は埼玉

県加須市に避難している叔父(母の弟)に勧められ、騎西句会に名を連ねて毎月投稿するばかりか、月刊誌を購読して意欲的に学び始めていたのです。

私には、俳句というものを知ることと、もう一つ大きな課題がありました。この俳句の中から賞を得る良い句を選定してくださる先生を探すことです。会議の中では、テレビの某番組に出ている人気のある先生や、有名な俳句会の重鎮といわれる先生にお願いしたらという意見がありました。

でも、私は第一に信仰をもっている人と決めていましたので、事務所の回りの人に心当たりがなしかを尋ねました。榊原寛先生なら、お茶の水クリスチャンセンターの関わりで、キリスト教関係の新聞や雑誌で活躍されている先生を紹介していただけるのではというので、恐れ多くも、先生にお会いする機会を得て直接お尋ねしました。

先生は探してみますと仰ってください、しばらくしてからお電話をくださいました。そして、なんとご紹介いただいたのが日本クリスチャン・ペンクラブの三浦喜代子代表でした。

二〇一六年十一月十四日、救世軍の事務所に三浦さんをお迎えして初めての打ち合わせをいたしました。輝く笑顔で事務所のドアを開いて入って来られた時に、なんとなく母の風貌と似ていてホッとしました気持ちになったのを覚えています。

この日は、いろいろ打ち合わせをしましたが、何より驚いたのは、三浦さんが俳句を勉強したいと思いい立ち、昨今、本屋に立ち寄る時には俳句の本を必ず買い、また、図書館で俳句の本を数冊借りてくるようにしているとのことでした。

私は、無我夢中で、この企画をどんな風に形にしたらいいのだろうとある種の不安を覚え、何と大それた事につけ始めたのだろうとうなだれていたのです。

ところが私が小さい世界で物事を考えていたのに、神様は必要な人々を選ばれていて、すでにこのことを知ったときに、私はどーんと、大船に乗ったような気持ちになり、何も心配することはないのだと知り、心の中がすっと軽くなりました。

第一回目の俳句コンテストは、二〇一七年三月末までの四ヶ月間で、二二一句が寄せられ、六月一日の救世軍創立記念コンサートの席上で、三浦さんを迎えて華やかに授与式が行われました。

そして、このイベントは少なくとも三年は引き続き継続して行い、投稿者のレベルを上げていくことにより、俳句集として形にすることを勧めてくださいました。現在は第二回目の取り纏めの段階です。

この三浦さんとの出会いは、私と母にとって付録のような別の楽しみも生まれました。

かねてより私は母に、終活の準備を始めようと言っていて、エンディングノートをプレゼントしていました。そして母の葬儀には、俳句集を参列者の方々にプレゼントしようと計画し、私は少しずつ母の句をパソコンで入力し始めていたのです。おりしも、ペンクラブでは、自分史の原稿作成が始まろうとしているところでした。俳句でも構わないというので、母にぜひ仲間に入れてもらうよう勧めたところ、まんざらでもないような返事でした。

一回の出会いが一度では終わらないという、不思議な経験を味わっています。そして、ペンクラブの方々が、主イエス・キリストを、ペンをもって証言するという、強い熱意に圧倒されています。自分史という文章の中に、救い主がどのように介入してくださったのかを詳らかに記した作品集『百花繚乱』を手にして、皆さんのクリスチャン人生を読む日を、母とともに心から楽しみにしています。

（藤井千明師と母上の井上弘子姉はお二人揃って入会され、例会に出席、自分史に取り組んでおられます）

## 憐みの島

松下勝章

元来、文学青年ではなかった。むしろ国語は苦手だった。でも、どういうわけか、若い日に覚えられられない詩がある。

ジョン・ダンという司祭の「島」という詩だ。

詩の中の、特に「波の来たりて洗い行くは……」、「何人（なんびと）の身罷りゆくもこれに似て、自らを殺（そ）ぐに等し」といったフレーズは、人生の中で何度も思い出された。

「あの人、亡くなられたらしい……」。ふだん何げなく登場する会話の中に、実は、自分の死、すなわち「波」によって、「殺（そ）がれる我が身の命のフレーズは、警告している。

実際、この「波」が近づいて来たのだ。高校三年の冬のある日、朝は元気だった父が、翌日には、故人になってしまった。

（いつか、自分も殺（そ）がれる）そんな恐怖が、寂寞感と共に押し寄せてきた。

その日以来、文字通り、藁をも掴むような想いで、「殺がれぬ島」を求めた。ついに決して殺がれないという「憐みの島（主イエス）」に辿り着いた。

それ以来、この島に碇を下して時折襲ってくる「波」に抗している。

ボクとおばあちゃん

西山純子

ボクが生まれたのは五月です。

デパートの売り場でボクが小さな手で押さえた鯉職を皆で選んでくれたそうです。五月になるとボクの家では、今もベランダで鯉が泳ぎ舞うのが年中行事です。

ボクはおばあちゃんの笑顔が好きです。

ボクを見つめているおばあちゃんの眼差しが、温かくて優しく何だかホワーンと包みこまれる、いい気持ちにしてくれる笑顔です。

おばあちゃんは日曜日は毎週教会へ行きます。

ボクもパパとママに連れられて赤ちゃんの時から、よく教会に行きました。

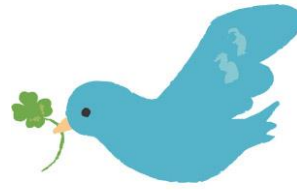
ボクは教会の空気が好きで直ぐに馴染みました。ボクはいつもニコニコしていたので、大勢のおじいさん、おばあさん、おじさん、おばさんたちに

「可愛い笑顔の坊ちゃん」と喜んでもらえました。大人の人たちといっしょに「アーメン」と言いました。特に頌栄の時には大きな声で言いました。

おばあちゃんは教会のご用をしていたので先におばあちゃん宅へ行きました。遅くなっておばあちゃんも帰ってきてから、皆で夕飯を食べました。

おばあちゃんはボクにもよくわかる言葉でお祈りをしました。そのうちにパパ、ママに教えてもらって、ボクも「神さま、感謝していただきます」と、先ず食事前の祈りをするようになりました。

おばあちゃんは、たくさん絵本を読んでくれたので、ボクはいつの間にか本を読むのが好きな少年になりました。四歳に始めたピアノも「いい音



ねえ。心がきれいになつていく響きねえ。ありがとう

といつも褒めてくれるおばあちゃんに励まされました。

ボクは中学生になり、お

ばあちゃんと度々は会えな

くなりました。おばあちゃん

は足が痛くなり、今までのようにいつでもボクのピアノ演奏会に来ることが出来なくなりました。

ボクはCDやDVDにして聴いてもらい見てもらっています。

ボクは十五歳、もうすぐ高校生です。

おばあちゃんは足が痛くても「神さまが、それ以上の恵みの時をくださったから大丈夫」と、笑顔で言います。

演奏会の前には「心こめた良い演奏ができますように祈っています」といつもメールをくれます。

ボクの人生にも色々なことがあるだろうなと思

みことばに耳を傾ける 長谷川和子

イエス・キリストの救いに与かつて五三年になる。

いつ頃だろう、たぶん三〇年位前からだと思

が、起床時、カーテンを開けると『神はそのひとり子を賜ったほどにこの世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅び

ないで永遠の命を得るためである』

(ヨハネ・三・一六)のみことばが

心の中に飛び込んできた。なぜこの言葉なのかわからない。

偶然に言葉となつて出た位にしか

思つてなかった、が、この日以来毎

朝カーテンと窓を開け、外の空気に

ふれると、このみことばが心に浮か

ぶのである。

どうしてかなと思いつつ、今では

当然として受け止めている。神はそれほどまでに

私が信仰から離れないように願っているのだと思

わされているからだ。

時に、感動的な場面に直面したとき、このみことばが心を突き刺すことがある。特に映画やTVを観ていてもこの言葉が入ってくる。

また、わけもなく涙が流れることがあって、自



分はおかしいのではないかと思うときもあつたが、長年の間にこの状態は神さまから「和子、永遠の命を得るために主により頼み、救われてない人々のために祈りなさい」と言われているように思えるようになった。

だから日々の祈りの最後に「全ての人があな

の恵みによって救われますように」と祈っている。

『み子を信じる者がひとりも滅びないで』の言葉は、神さまは全世界の一人一人を愛しておられ、神に目を向けなさい、と望み、まだ神に気づかない者に対しては切に主の道を歩みなさい」と願っているのではないだろうか。

そのために私たちペンクラブの者たちは「大きな使命」を神さまから託されていると思う。文字によって伝道をお願いしつつ励んでいるのだ。そのため

のために祈りつつペンを走らせていきたい。

正に『キリストの言葉をあなたがたの内に豊かに宿らせなさい』(コロサイ・三・一六)の言葉に尽きるのではないだろうか。

今日もカーテンを開ける。

飛びんでくるみことばに力を得て、「一日、守りたまえ」と祈る朝である。

## 導き

## 山本披露武

いつも心温まるメールをいただきありがとうございます。藤田さんもご存知のように、わたしはほんとに弱い人間です。少し熱を出しただけで大騒ぎをし、「あなたは大きすぎるから」と、よく妻に言われたものでした。

その弱いわたしが突然妻を亡くしたのですから大変です。眠れない夜が続いて体調を崩し、独り暮らしに不安を覚えるようになり、早急に老人ホームを探すことにしました。

幸い、近くに介護付き老人ホームがありましたので訊いてみますと、「自立者でも入居できますが外出は身内の方の付き添いがないとできません」と言われて入居をあきらめ、地域包括支援センターを通して緊急通報システムをつけていただき、独り暮らしを続けることにしました。

しかし緊急通報システムだけでは安心できず、せめて体調を崩した時だけでもヘルパーさんをお願いできないものかと思つて、何か所かの介護事業所を回ってみました。

ところが、ある事業所では「介護認定を受けていないと駄目です」と言われ、また別の事業所では、「継続的に毎週決まった日時に利用していただかないとお引き受けできません」と断られてしまいました。

それでもあきらめることができず新聞やインタ

ーネットを通して調べている内に、『サ高住』（サービス付き高齢者住宅）というのがあることがわかりました。

部屋は十八平米そこそこで、少し狭いですが、外出も外泊も自由、その上、安否確認があつて三度の食事もあるというのです。

（サービス付きというのだから掃除や洗濯などもしてくれるかもしれない。でも、狭い部屋なので掃除ぐらひは自分でしてもいい。とにかく、三度の食事があつて安否確認までしてくれるというのであればそれで十分）

そう思つて喜び、早速入居することにしました。ところがそれが大失敗、一週間もしない内に家に帰りたくなつてしまいました。『サ高住』についての考えが甘かつたのです。サービスと安否確認について誤つた理解をしていたのです。

なるほど、三度の食事は出ます。しかしそれ以外では三時ごろにお茶を持ってきてくれることと、郵便物などを預かってくれることぐらいで、他にはサービスといえるようなものがほとんどありません。さらに大きな誤りをしていたので安否確認です。

介護資格を持つ職員が何人かいますので、体調が悪くなれば介護もしてくれるものと思つていました。ところが介護付き老人ホームと違って、サ高住は自由度が高い代わりに介護サービスが無いのです。そのため、介護を受けたい人は介護保険

を利用して、介護事業所からヘルパーさんに来てもらったり、デイサービスに通ったりしているのです。

しかし介護認定を受けていないわたしにはそれはできず、食事の時以外は自分の部屋で独りぼっち、まるで籠の鳥です。けれども、自分の思い違いによつてそうなつたのですから仕方がありません。

結局、わたしは家に帰る決心をしました。幸い、家（マンション）は処分していなかったので、帰ることができました。

ところが独り暮らしをするためには、やはりそれなりの対策を立てておかなければなりません。

しかし、いくら考えても安心して暮らせる方法が見つかりません。そうこうする内に体調が更に悪くなり、胃の痛みに加えて血圧の上昇、口渇、それに全身倦怠感や息苦しさなどに悩まされて精神的にもまいってしまい、係り付けの医師から「精神内科の医師を紹介しましょうか」と言われるほどになつてしまいました。

それでも家に帰ることをあきらめなかったのは、藤田さんをはじめ、たくさんの信仰の友が電話やメールで慰めや励ましの言葉を送ってくださったからでした。

そうはいっても中々いい案が浮かばず、かなり弱気になつていた、ある日のことでした。見舞いに来てくれた、やはり信仰の友で、ヘルパーをし



ている人が「山本さんでしたら、介護申請をしたらきつと認められますよ」と、信じられないようなことを言うのです。

妻が介護申請をした時は糖尿病だった上に、圧迫骨折で背中がくの字に曲がり、その痛みで台所仕事ができなくなっていたにもかかわらず「要支援の1」しか認めてもらえなかったもので、わたしなどとても認定されないと思っていました。

ところが友が「大丈夫、今の山本さんは独り暮らしだし、年も八十歳を超えていますから、きつと認定されますよ」と、自信ありげに言うのです。

それでもわたしは信じる事ができませんでした。しかし友があまりにも熱心に勧めてくれるので、駄目元と思って申請しました。

するとなんと「要支援の2」が認められたのです。そのおかげで週に二回のヘルパーさんの助けが受けられるようになりました。それだけでなく週に一回、看護師による訪問まで受けることができるようになり、しかも、必要な時には三六五日、何時でも看護師が駆けつけてくれるというのです。お願いすれば鍵も預ってくれます。そこまでしていただければ、もう、大丈夫です。わたしは体調が回復するのを待つて家に帰ることにしました。もし妻を亡くした直後に介護申請をしていたとしても、おそらく「要支援の2」は認定されなかったと思います。

そのためには、サ高住に入居したことも含めて、

神様がわたしの弱さを用いて、すべてのことが必要だったのだ。今は神様の導きに感謝しています。

最後になりましたが、ある人が教えてくれました。「神の御業に期待しましょう。それがクリスチャンライフの醍醐味です」その言葉で心にあった不安が吹き飛び、明日に希望がもてるようになりました。

それから神様がどの様な日をごくださるのかと思っただけで今日が楽しくなってくるのです

主に感謝して



生かされて七七年\*書きつつ歩んで\*

三浦喜代子

昨年からJCP関東では「ミニ自分史」を書き合っている。作品が出揃えば来年度あたり一冊の出版をと目指している。

それとは別に、私自身が人生の総括の一つとして自分史をまとめる時期に来てはいないかと《上つお方》からささやかれている気がしている。

そこで、取りあえず筆をおろした。はたして書いたものが日の目を見られるかどうか、それもお任せしてのスタートだから、今時点での「はじめに」をここに記してみたい。

《喜寿》この記念の年に、立ち止まって深呼吸し、来し方を振り返り、心に移りゆくながしかを書き記してみようと思ひ立ちました。だれもが思ったり実行していることですが、「われもまたしてみんとて、するなり」の心境です。

超高齢時代の今、七七歳、別名《喜寿》を迎えたと言つてもたいして珍しくありません。女性の平均寿命が八十歳を越しているのですからなおさらです。

「おめでとう！」でもないのです。強く意識するのは初めてこの歳を経験する本人だけなのかもしれ

れません。

しかし、意識せざるを得ません、七七年の一日、二八一〇五日を生きてきたのはほかならぬわたし自身なのでから。

心には歳月の隅から隅までがはみ出すほどに詰り込められています。もちろん記憶の層はあちこちで崩落し、忘却のあなたに消えてしまったことも多々あるでしょう。しかしつい昨日のことのように色鮮やかに覚えていて決して忘れられないこともあります。

その中にはとうとう今までだれにも言えなかったことや敢えて言わなかったことや、神さま以外には知らないこともあるはずですが。

「生かされて」には特別な意味があります。

かのスタンダールの墓碑には「書いた、愛した、生きた」と刻まれているそうです。彼は自力で勇ましく精一杯「生きた」から自動詞で言い切れたのでしよう。しかしわたしは「生きてきた」とは言えないのです。他の力によって「生かされて」と、受動態を頼みとするばかりです。卑下ではなくむしろ喜んで「生かされて」なのです。

そのわけは追いついてお話ししますが、七七年のある時、意気揚々と突っ走って「生きた」はずの道が突然途切れ、真逆さまに死の谷へ転落する惨事に遭ったからです。肢体に傷を負い、なによりも心が折れ砕けて、生きる望みを失くしてしまいました。

三十代から五十代にかけて立て続けにそうした暴風雨に翻弄されたのです。

わたしは十五歳の時にイエス・キリストに救われ、以後教会を最優先して信仰生活を続けてきました。思い返せば、わたしの信仰は弱く、神という愛の海の、広さ深さなど知ろうともせず、子どものようになごさで水遊びをしていたにすぎなかったのです。

神は、無鉄砲に暴走するわたしを、愛を秘めて忍耐強く見守っておられました。

ある時、神の愛の息吹をごく身近に感じたわたしは、「生かされてきた」ことが瞬時にわかったのです。そして、これからも「生かされていく」とを確信でき、そのときから恐れや思い煩いが朝霧のように消えて、暖かな光と香りのよい小花の咲く小道を一步一步踏みゆくようになりました。「書きつつ歩んで」は、神の愛を、肌で知って以てのささやかなライフワークです。

わたしにとって「書く」とは、「生きる」から「生かされる」への人生転換を成してくださったイエス・キリストからの「新しいのちと愛とゆるし」の体験を記すことです。文芸のジャンルでいえば、ドキュメンタリーでありエッセイですが、わたしの「書く」はときにメルヘンや小説にも広がっていききました。

「書く」は七十七歳の今や、一日一日を歩む日常になつてしまいました。時々思い立って書くのは

なく、三度の食事のように欠かせない営為です。

「祈り」が呼吸となつているように、です。「祈つては書き」、「書いては祈る」がわたしの一日という布を織る縦糸であり横糸です。しかし、あくまでも、今現在のは、です。明日はわかりません。

『喜寿』の「喜」には二重、三重の楽しさを味わっています。「喜」はわたしの名前のひと文字であり、草書体、または俗字では七を三つ、すなわち上一つ、下に二つ並べた書き方をします。「喜」はトリプルセブンの文字なのです。「七」は聖書では完全数と言つて、神の完全・つまり十字架の愛を表しています。

「生かされて七七年\*書きつつ歩んで」は、神の創作ドラマです。わたしは神によってこのドラマのヒロインに抜擢され舞台上に上られました。神は大根役者を敢えて選ばれました。無限のあわれみによるものです。

「キリエ・イレイソン」(主よ、我をあわれみたまえ)と祈りながら書き進めていきます。

言葉は次の言葉を運んでくると言われます。確かにこれ以後筆は進んでいます。かの『上つお方』が盛んに希望の風を送ってこられるからです。これからも風に誘われ風と戯れ、風に乗って筆を進めていきたい、それが今の私の祈りです。

『我が上に翻る旗じるしは、愛であった』雅歌

## さくらもバラバラ

篠田一志

春の陽射しに誘われて、日だまりのベランダでじっとたたずんでいると、光の毛布にくるまれていくように心地よかった。

しばらく、その余韻に浸っていると、先日行われた二十歳の青年の洗礼式と、とくにその祝会のなかで「若い時に洗礼を受けることはすばらしいことですね」と話されていた婦人たちの姿が思い出された。

その中に、婦人たちの言葉に応答するように首を大きく縦になんども、なんども振ってうなずいている者がいた。よく見ると自分だった。

五〇歳を目の前に、人生の回復を求めて洗礼を受けた者にとって、もっと早くキリストに出会っていればと言う思いからか、その婦人の言葉に強くうなずく。

同時に、なんで、救われる時期が一人ひとりバラバラなんだろうか、ちよつとした疑問も生まれた。確かに若くして洗礼にあずかる者もいれば、イエスとともに十字架刑につけられた強盗のひとりの様に、この地上を去る間際に救われる者もある。

そのバラバラの不思議さを考えながら、ふとベランダの外をみた。そこにさくらの木があった。つぼみが一ぱいついていた。もうしばらくすると

開花を想像するに充分なふくらみを持ったつぼみばかりだった。

そのとき、「あ！さくらもバラバラだ」と思わず声が出てしまった。今はみな同じように見えるつぼみだが、開花宣言のとき咲くもの、満開のときに咲きそろうもの、やがて訪れる葉桜のときまで待つて咲くものとバラバラなのだ。

はたして、満開のとき咲くさくらが葉桜のとき咲いたさくらよりも偉いと誇るだろうか、否、いつ咲いてもさくらにはさくらなのだ。けして、つぼみ同士が咲く時期を競ったり、争ったりなどしない。何だか、洗礼の時期を気にしていた自分が恥ずかしくなった。

何事にも人智を超えた摂理がある。その摂理を受け入れているから、さくらはいつ咲いても美しく、咲き誇っている

ではないか。救いも同じだと思う。若いときに洗礼を受けようが、この地上を去る直前に受けようが、救われたことがすばらしいことなのだ。

この救いの摂理を受け入れてこそ、真の喜びと感謝の心が生まれると思う。



## 患難さえも喜ぶ者とされ

富岡国広

私は二年以上前に帯状疱疹にかかった。見えにくい場所であったため気付くのが遅れ、症状がかなりひどくなってしまう、その痛みはいまだに続いている。

その痛みを経験された方も多々おられるであろう。

耐えがたい痛みのさなかで、私はこの痛みを自分なりに神さまの「懲らしめ」と受け止めた。

しかし、一向に癒えないことから、時には苛立ち、時には疑いの波に弄ばれて、神に「なぜいつまでこののですか」と不満をぶつけてしまうこともあった。

さらに「どうか一刻も早くこの痛みから解放してください」と、何度か祈ってもいた。

そうした信仰と不信仰の狭間にあって、ふと、あることに気づかされた。

私はどちらかといえば忍耐に欠けている。過去をかえりみてなるほどと肯けることがいくつもあ

る。もし、いま即刻神である主がこの痛みを癒してくださいとしたとしても、かたくなな私は、喉元過ぎればのことわざの通り、すぐに忘れて何等かの形で自分を誇るに違いないのだ。

だから神は真に忍耐が身につくまでは、痛みを

持続させておられるのだ。神である主が全て御存知であられることとして。

聖書（詩篇一一九篇七一節）には『苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。それであなたのおきてを学びました』とある。

確かに、痛みや苦しみの渦中にいるとうれしくも楽しくもないし、ただただ辛くて、悲嘆に明け暮れるばかりである。



のではないか。

神である主が良しとされるなら、すぐにこの痛みが癒されること、また、この痛みが癒される時こそ、神のおきての真の忍耐が私に備わること、それを今は堅く信じる者とされたと確信している。

『…患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです』

ローマ・五・三、四節

## 八一歳の遺言

島本耀子

前理事長の池田先生のご提案により、みんな「遺言」を書いたことがあります。

先生はすでに病で召されましたが、告別式で明かされた先生の遺言は二〇年前から変わらず、ご自身の葬儀に関することのみで、信仰に貫かれた生き方を示すものでした。

闘病生活の間も、ニュースレターの巻頭メッセージを二五、二六、二七号と、最後まで寄せてくださいました。先生は三篇を通して、信・望・愛に裏打ちされた言葉を心に届けようと望んでおられました。

まだ救われていない人たちのために、美しい日本語で、神の愛を伝えて行こうと、私たちに呼びかけてくださったのです。これこそ、先生が私たちにくださった遺言でしょう。

もう大分以前のことですが、夫に倣って海外旅行の前に遺書を書きました。もし飛行機が落ちるなら、往きよりも、旅行を楽しんだ後の帰りの便でと思います。特別なことはないがお葬式は教会で。こどもたちは仲良く暮らすようにという、そんな内容でした。

遺言には一応の決まりごとがあります。先ず、

自筆であること。何通か書き直した場合は、最新の日付が有効等。一方的な思い込みで書かれた遺言書は、相続人たちが戸惑います。

『八十歳の遺言』という本を読み直してみました。作者のSさんとは職場上の短いお付き合いでしたが、後にご次男のIさんが歌手・俳優で有名になりました。作者の考案した製品を思い出して懐かしく、随筆に書いて長い間温めていたのを、思い切って送ると、折り返しこの本が送られてきたのです。

添えられたご長男の手紙によると、Sさんは十ヶ月前に急病で突然亡くなっていました。「さぞ懐かしがったと思います。話ができたらと残念です」と、短い文面でしたが、母上への暖かい思いのじむ内容でした。

Sさんは文章を学び、何冊かの本を出版していたのです。最後の執筆だという『八十歳の遺言』には、過去の様々な想いが率直に綴られた、自己史的なものでした。十六歳年長のSさんですが、私もその年を超えて読み返すと、新たな感慨が湧き、教えられることもあります。

遺書と自分史には共通性がありそうです。「さっさと書かないと間に合いませんよ」と、Sさんの声が聞こえたような気がしました。

## JCPとの深い絆

佐藤由子

結婚前は横浜の自宅近くの教会に通っていたが洗礼を受けるまでには至らず、結婚を機に遠ざかり、転勤で名古屋に住むようになった。そこで、私の人生の大きな転機になる出来事が起こった。

故玉木功牧師の教会に導かれ、先生から洗礼を授けていただいたことである。洗礼準備の中で先生から「自分史を書きなさい」と勧められたが、先生の生前には果たせなかった。

息子が教会付属の「こひつじ園」でお世話になる中で、連絡帳に私は様々なことを綴った。先生は「日本クリスチャン・ペンクラブ」の集いに参加してみないかとお声を掛けてくださり、ちょうど満江巖先生の講演会があって、先生とともに参加した。

夫の名古屋転勤が終わり、横浜市内の社宅に住むようになった時、満江師からお便りをいただき池袋の例会に何度か通った。しかし、子どもたちが幼かったこともあって落ちついて文章を書く余裕もなかったため、残念な思いであったが退会した。

それから二〇年が過ぎ、夫は退職。介護のために夫の実家のある岩手県一関に移転した。

二〇一一年二月九日、近くの千厩教会を訪ねた。その直後、三月一日の大震災に襲われた。教会

は危険で入れず、仮会堂で礼拝が守られた。私は転入会を許され、被災地の真ん中で信仰生活に励むことになった。

ペンクラブが忘れがたく、検索して事務局に電話した。三浦さんが出られた。懐かしくてうれしくて胸が張り裂けそうだった。

三浦さんからはまもなく六〇周年の記念会があるからよかつたらお出かけくださいとお誘いをいただいた。喜んで出席した。

その後玉木先生が召され、先生への感謝の思いも込めて再入会した。

それから五年間、隔月の例会を目指して生活を調整し、横浜の実家や子どもたちをも訪ねて数日間を関東で過ごすことになり、たいへん充実した時をいただいている。

かつて、横浜時代に習ったオカリナを用いていたとき、教会でもJCPでも演奏の時を与えられ、神様からの思いがけないプレゼントに感謝していた。過日の六五周年記念会でも演奏の恵みをいただいた。

愛と忍耐に富み給もう神の変わらない導きの御手にすがり、これからも岩手、東京、横浜の旅が続けられるように祈り願っている。

『主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで』詩篇一〇七・一

## 中学生男子の姿から

安東奈穂美

中学生時代、隣の市の教会に通い始めました。後輩にひととき元気な数人の男子がいて、いつも笑ってふざけ合っていました。

ちようど、悪い言葉遣いが面白く感じられる年です。

ある時、その男子達が

「エペソびと、エペソびと」

と言っています。伝道師の先生に教わったそうです。聖書のエペソ人への手紙を開いてみると

「愚かな話やみだらな冗談を避けなさい。…それよりは、むしろ感謝をささげなさい」(口語訳聖書)とありました。

彼らは、先生の言葉と語られた聖句をしっかりと受けとめたのです。その場限りにせず、その後の生活でも繰り返し思い出そうとしている姿が印象的でした。私にも、聖書がより身近になった気がしました。

(今、自分は神の言葉を真摯に受けとめているだろうか…)

彼らの「エペソびと」は、数十年後の私にもセピア色の思い出と共に静かに語りかけてくるのです。

『それぞれの自分史』ただいま進行中!

近年、JCP関東では二年に一冊のペースで会員の「あかし作品集」を出版してきました。昨年は創立六五周年にちなみ『山川草木』と題して出版しました。

今回は『百花繚乱』—それぞれの自分史—の発行を目指し、ただいま熱く取り組み中です。

会員への執筆案内では以下のように呼び掛けました。

「百花繚乱とは、種々の花々が色とりどりに咲きみだれる絢爛たる様子です。私たち一人ひとりには神様の庭園を飾る百花の一輪です。いただいた人生を振り返り、さまざまの出来事を通して体験した主の恵みを刻銘に書き綴っていきましょう」

隔月の例会では、原稿用紙換算で三枚の作品を持ち寄って合評し、それを基に各自推敲して仕上げていきます。

自分史ですから思いのままに書き進めて行けばいいのですが、時系列的に十年単位で一区切りとするのも一つのヒントです。

例えば、幼年時代、十代、二十代……、中年時代、熟年時代、七十代、八十代、現在から将来へ、などなどです。

書きあがったら、統一した《ミニ自分史》にな

るように全編を見直します。

ひとりの受け持ち分量は原稿用紙で二〇枚から三〇枚程度ですがもつと増えてもよし、です。気を付けたいことは、時や場所はできるだけ正確にするのが望ましく、不確かな場合は調べることで。元号でも西暦でも、ミックスしても良しとします。

一番気を付けたいことは他の人のプライバシーを冒してはいけないことです。自分以外は無理に実名を出す必要はありません。

様々な制約がありますが、自分の人生を通していかに神様の栄光を表すか、です。しかし、表面的にきれいなことだけを並べても、読み手の心には届かず、それでは《あかし文章》の使命は果たせないでしょう。

こうして、目下、会員一人一人、自分史と真剣に格闘しながら書き進めています。

なお、会員以外の方でも参加したいと思われるら、挑戦してみませんか。詳しいことは事務局までご連絡ください。JCPに友人がおられましたら、その方にお話しくください。(三浦)

### 日本クリスチャン・ペンクラブ(JCP)の自己紹介

起源は、1952年に発足した基督教文筆家協会にあり、村岡花子らプロの作家たちが立ち上げました。その後1963年に満江巖氏を中心に現在の名前に改名し、広く門を開いて、一般信徒が「あかし文章」を学び、書き、広める働きを進めて、現在に至っています。

現在は2つのブロックで活動しています。★関東ブロック(関東以北の地域)★関西ブロック(大阪周辺と西の地域)です。

活動内容は各ブロックが自主的に進めています。それぞれに作品集を出版しています。最近では関東が『山川草木』、関西が『種を蒔く4号』を発行しました。

また Web 上にホームページを開いています。(URL <http://jcp.daa.jp/>)

◎「あかし文章」に関心のある方はこの誌のトップ頁、またはHPのアドレスにご連絡ください。関東、関西は隔月に例会を開いています。案内はHPに掲載します。なお本誌「文は信なり」は関東ブロックが年2回ほど発行しています。HPにも掲載します。